

思考の経路

森孝一

第16回

ガラス作家・西中千人の作品にみる宇宙観

「出る杭は打たれる」という諺がある。あまりさした振舞いをする人から責められるという意味だが、逆に「能ある鷹は爪をかくす」という諺もある。才能、手腕を持っている人は、これをみだりに人に見せないという意味だ。しかし、西中は特定の団体に属していないので、打たれることも隠すこともない。兎に角、自由人だ。そして、日本人には珍しく行動力のある作家だ。彼はよく旅に出かける。その旅先は、国内はもとより、北極、南米、香港、アメリカ、ヨーロッパ、北欧、アフリカなど世界54ヶ国に及ぶ。その国々で出会った人々や体験から創作のエネルギーを摂取し、新たな作品へと繋いでいく。また、茶碗、花瓶、日本庭園におけるガラスの枯山水など、作品ごとに各分野の専門家と出会い、積極的に対談を行っている。茶陶研究の第一人者の林屋晴三、いけばな小原流家元の小原宏貴、作庭家の重森千青等々である。ユニークな存在としては、舞踏家の田中泯、小津安二郎研究の米谷紳之介といった人物もいる。こうした専門

門家と知り合うことで、西中の作品はさらに深化し大きく飛躍している。1964年、西中は和歌山県和歌山市に生まれた。88年、東京の星薬科大学薬学部卒業。大学3年の時に中国の西北大学に1年間留学。卒業後は薬剤師免許を取得するも、丸の内にある画廊に勤めた。芸術の道に進みたくなかった。自分の進路に悩んでいた頃、浜辺をドライブしていて、偶然、あるガラス工房に立ち寄る機会がありました。これが私の人生の転機となりました」という。カガミクリスタルで見習いとして働き、数ヶ月を経た頃、ある職人さんから「何十年か前にも、お前さんに似たのがうちに来たよ。今は大学の先生をやっているはずだから、一度会ってみるといいんじゃないか」と言われ、多摩美術大学名誉教授の伊藤宇を訪問した。伊藤の「本格的にガラスを勉強する気なら、アメリカの美術大学に入ったほうがいい」という助言に従い渡米。「カリフォルニア美術大学ではガラスアートと彫刻の技術や表現力を磨くだけでなく、社会におけるアートの役

割など芸術に関する様々な理論を学びました。講師はいずれも第一線で活躍するアーティストであり、ここで学んだことは今も大きな財産となっています」という。西中の日本人には珍しい思考力や行動力は、本人の性格もさることながら、アメリカの第一線で活躍するアーティストからの影響も大きい。西中が制作する作品の領域は、器からオブジェまで幅広い。自ら作ったガラスを叩き割り、再び溶かし、別のガラスと合わせて継ぐ「ガラスの呼継」をライフワークとしている。継ぎ目には、金と赤・青・緑と透明の5種類があるが、とくに透明の継ぎ目は品がよく、まさにガラスとガラスを繋ぐ空間である。西中は、海外のアートフェア（ニューヨーク、ロンドンなど）や国内の画廊で個展を開催し、その作品は国内はもとより、イギリス、フランス、スペインや北欧の美術館・大学などにも収蔵され、高い評価を得ている。

西中のもう一つの取り組みが、日本庭園の石をガラスに置き換えたインスタレーションである。それは日本庭園の理念に則ったもので、根本的には「呼継」と同じ再生をテーマとしたものである。このリサイクル瓶を活用した資源循環アートは、岐阜県大垣市の日本耐酸塩工業株式会社と共同研究で進めている。2017年、日本橋高島屋1階正面ホールに展示された「一瞬に煌めく永遠」ガラスアートの理想空間へは、光り輝く大小17点のオブジェが天へとびる西中の宇宙観を表現した作品だ。その作品に対して、有人宇宙システム株式会社代表取締役の古藤俊一は、「小さきままな、まるで生命体のようなガラスが宇宙に向かって伸びようとするエネルギーを感じます」「そのような宇宙観を理屈ではなく、直感的に伝えるのがアートの力かもしれないですね」と西中との対談で語っている。

閉鎖的で保守的な日本のアートの世界にあって、何の後ろ盾もなくこの道を進んでいくことは、決して順風満帆なことではない。西中が、よく旅に出かける理由がここにある。世界を旅することで素敵な人と出会い、その体験が創作の大きなエネルギーとなっているのだ。そして、西中の夢は遥か宇宙へと広がる。「月でインスタレーションをやってみよう。資金はクラウドファンディングで幅広く集める」というのだ。今や宇宙開発は、冒険の段階からビジネスの段階へと移行している。夢のような話だが、そんな夢を語るのも西中らしいと思う。

の本質を捉えて、光という新たな要素を取り込むことで、伝統の上に現代の庭を再構築した「光の庭」だ。作品を展示する場所が室内から野外に移ることで、西中のガラスアートは宇宙と一体化し、光と水、命の無限の循環の表現へと進化した。京都の法然院に設置した「ガラスによる枯山水」つながる」がそれだ。リサイクルガラスを用いて制作したオブジェが、苔や砂利と共に40メートルの参道に配置されアート空間



「呼継器『岩戸』」2021年 H8.0×W13.5×D13.0cm 作家蔵 写真：nrk6364



「一瞬に煌めく永遠 ～ガラスアートの理想空間へ」2017年 日本橋高島屋S.C.本館1階正面ホールでの展示 写真：森健児



「呼継『興味』」2021年 H31.0×W20.5×D20.0cm 作家蔵 写真：nrk6364

もり・こういち 1951年愛知県生まれ。美術評論家。東京国立近代美術館工芸館美術品購入等選考委員会委員、滋賀県立陶芸の森・陶芸館評議委員（2003～11年）、都留文科大学非常勤講師などを歴任。現在公益社団法人日本陶磁協会常任理事、八王子市夢美術館の資料収集選定委員など。

にしな・ゆきと 1964年和歌山県生まれ。88年星薬科大学薬学部卒業。89年カガミクリスタル株式会社入社。91年カリフォルニア美術大学留学（～94年）。95年富山市立ガラス造形研究所助手（～97年）。98年ニシナユキト GLASS STUDIO設立。2013年CREATIVE HACK AWARD 2013グラフィック賞（WIRED主催）。20年World Media Festivals金賞（ドイツ・ハンブルク）。個展・グループ展・アートフェアへの参加多数。主なパブリックコレクションにヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（ロンドン）、オックスフォード大学アッシュモリアン博物館（イギリス）、パリ市立テュルヌスキ美術館、スペイン国立ガラスセンターなど。